地域社会の〝心〟をつなぐ

ボランティア活動

特集2

もしも自分が

黒埼町保健委員会

「もしも自分がお世話になることになったら、そう考えるとやらないわけにはいきません。」と、黒埼町保健委員会会長の小寺フミさん（金巻）

保健委員会では、七年前から毎年三回白寿荘（巻町）でボランティア活動をしています。白寿荘には、体が不自由な老人が百名生活しているのです。

九月は、大野、金巻、興野、鳥原地区の保健委員が庭の草取り。十月はガラス磨きと障子張り。木場、板井、黒鳥、小平方の委員でした。そして、十一月六日(金)、山田、寺地、立仏、善久、柳作の委員二十三名が障子張りのボランティア。冬が近い。

「自分の家もまだなんですよ。」と笑いながら作業開始。早い。二時間ほどで終了。

初めて参加したという高田智恵子さん（山田）は、「仕事をしたといえないぐらいに早く終わってしまいました。もっと何かないかしら。」また、四年目の青木幸子さん（山田）は「こういう施設があることをもっと知ってもらいたい。」と言っていました。

今度は対話。お年寄りには話し相手が必要です。初めからこのボランティア活動をしている細江シン子さん（中学通り）は、「いつも来るのでもう自分の子供のように話されるんですよ。私も親だと思っています。でも、その人は最近目を悪くされて、『もうあんたの顔が見られなくなった。』と言われたときには泣きそうになりました。私自身は特別なことをしているとは思いません。」

白寿荘には本町からも五名入園されています。生活だけでなく、看護、リハビリテーション、リクリエーションも行っています。本町の保健委員会の他に、巻町、西川町、燕市の婦人会や巻高校からもボランティアにやって来ています。個人のかたもいるそうです。

宮腰重平事務長は「ほんとに感謝しています。特にこの施設は障子が多いものですからいつもお願いしてるんです。」

もう少し話を伺ってみましょう。

——作業の後の対話も喜ばれているようですね。

宮腰「はい。対話だけでもありがたいんです。とにかく、話をすることが老人にはいちばん重要なんですよ。」

——ご家族の方や知り合いの人が面会に来るんでしょう。

宮腰「ええ。毎日のように来られる人もいます。でも全然来ない人もいます。面会は毎日でもお願いしたいですね。」

——りっぱな施設ですね。

宮腰「そうですか。でも、新潟県全体では施設はたりません。」

——物よりも心と言われていますが。

宮腰「それには、まず施設をじゅうぶんに建ててからです。」

——白寿荘の方が家庭よりもいいでしょうか。

宮腰「難しいですね。家族の世話にならなくてすむということでは気が休まると思います。」

保健委員会では今後も続けていく予定です。しなければならないからではなく、したいと思うからです。

▶「家の障子張りだなんですが…」

あなたのランプの灯を
もう少し高く
かかげてください
見えない人びとの
行く手を照らすために
ヘレン・ケラー

ボランティア——その第一歩は社会を見ることから始まります。いろいろなことが見えます。憤り、悲しみ、羨望を感じます。ある不幸を見ます。心に痛み。

「自分には関係がない。」——そのとおり。「社会福祉も充実している。」——確かに。「でも……。」——そうです。その「でも」から始まります。ボランティアへの第二歩です。

今年度の新潟県世論調査では、実際に活動している人は約八パーセント。また、八パーセント弱の人が「活動方法などがわからない」と答えています。意思はあっても「何をどうすればいいのか。」と、戸惑っているといえます。

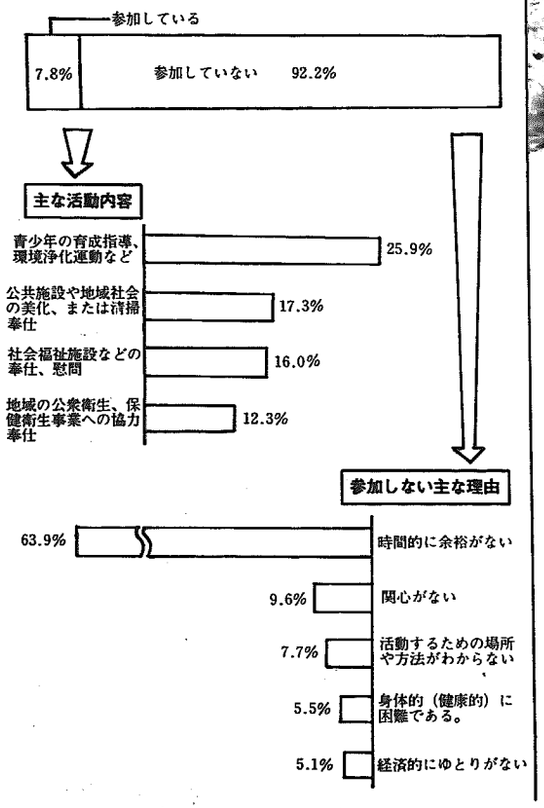
しかし、時間的に、経済的に、身体的に不自由であるから参加できない人は七四・五パーセントもいます。これは逆説的に、「社会福祉がまだじゅうぶんではないのではないか。」という疑問をいだかせます。

だれもが健康で文化的な生活をしたい。そのために、ほんの少しみなさんの力をお借りしたい。もちろん、できる範囲でいいのです。あなたも参加してみませんか。

▶「体の具合はどうですか。」

ボランティア活動への参加状況

新潟県世論調査（昭和56年）



おむつたたみを十年

黒埼町婦人会

▲いつになったら終わるのでしょう

黒埼町婦人会は、毎月一回、西新潟病院でボランティア活動をしています。もう十年になりました。

作業はおむつたたみです。この病院には、重症心身障害児が百二十人います。一日のおむつが四千枚。

十月二十九日(木)、板井地区の婦人会が十一人で奉仕しました。午前中、次から次へとおむつをたたみます。それでも終わりません。

萩野文子さん（板井）は「私たちは月一回ですけど、行かなかったら困るでしょうね。」と話されています。

佐藤キクさん（木場）は「正直言って疲れます。でも、自分の子供が健康な分だけ奉仕をしていきたい。」と、今後も続ける予定です。

◀いくらあるのでしょう

古切手・小銭を寄附

黒埼中生徒会

黒埼中学校の生徒会が十一月六日(金)、小銭と古切手を社会福祉協議会に寄附しました。小銭は一円玉がほとんどで、ずっしり重い。一万八百二十円。古切手は約千二百枚でした。

黒埼中は以前にもベルマークの収集で、全国で三十五位の高成績でした。（広報一八〇号）

古切手は、キリスト教会などを通じて切手商に買いとってもらい、その代金は世界の恵まれない子供たちのために役立てられます。たとえば結核患者の多いヒマラヤ地方の子どもたちにとっては、予防に欠かせないBCGの注射代になったりします。大体、四百枚で注射一本分です。つまり、黒埼中の生徒会は三人の子供を救ったことになるのです。